

泉鏡花「外科室」試論 観察、そして解釈
-予が画師たる利器-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2019-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 夢紬 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20012

泉鏡花「外科室」試論

観察、そして解釈 — 予が画師たる

利器—

An Essay on IZUMI Kyoka's
“GEKASITSU” from a Point of
View of an Artist's Superiority; his
Observation and Interpretation

博士前期課程 日本文学専攻 二〇一八年度入学

岡 本 夢 紬

OKAMOTO Yutsumi

【論文要旨】

泉鏡花「外科室」は明治二十八年六月、『文芸倶楽部』に発表された小説で、九年前に出会った二人の男女が、既婚の貴婦人とその担当医として再会し、同じ日に死ぬまでを描いた物語である。本作に対する同時代評は賛否両論で、とりわけその奇抜な結構や独特のテーマには多くの

関心が寄せられていた。

これまでの先行研究では高峰と貴船夫人との関係で読まれることが多かった本作であるが、語り手である「予」も、職業や高峰との関係などが設定され、小石川の植物園で佳人に心惹かれ、九年後に同じ女性との再会を果たすという体験を高峰と共有している一人の登場人物であることを忘れるべきではない。

本稿では、まず高峰と貴船夫人の恋愛の物語が、「予」の多分に主観を含む語りによって読まされる物語であることを念頭に置き、「予」と高峰の職業、貴船夫人の女性という立場について考え、彼らが社会から与えられた役割（＝〈職掌〉）と言う観点から「外科室」を読み直すことを目的とする。

登場人物の〈職掌〉を通すと、これまで本作で読まれてきた〈純愛〉というテーマは高峰と貴船夫人との間にはなく、「予」と貴船夫人の間こそ存在すると読むこともできると言えよう。

【キーワード】 泉鏡花、外科室、観察、解釈、職掌

おわりに

泉鏡花「外科室」は、明治二十八年六月、『文芸倶楽部』第六編に発表され、明治三十一年九月『明治小説文庫』に収録された。

「外科室」（以下、本作とする）は、九年前に出会った男女が、既婚の貴婦人とその担当医として再会し、同じ日に死ぬまでを描いた物語である。本作に対する同時代評は賛否両論で、とりわけその奇抜な結構や独

特のテーマには多くの関心が寄せられていた。

たとえば「泉鏡花」（青年文記者『青年文』明治二十八年七月十日）には、『外科室』趣向亦奇抜、殊にその末句（中略）の一語、何等峭絶の語ぞ。」とあり、また、『文芸倶楽部』第六編（ほしつよく『早稲田文学』明治二十八年七月二十五日）では「滔々たる世の凡庸小説と全く別なる方面に立ち、（中略）実感主義の通弊を脱し得たる所、此の作の主なる特相ならん」と評価されているが、「小説界の新傾向」（無署名『帝国文学』雑報、明治二十八年八月十日）には「鏡花子はよく人生の恨事を知れり、而して此恨事が常軌の道德を以て抑厭すべからざるを知れり、人間の胸の内にも滂湃たる激浪のやゝもすれは、理性を溺らせんとするを知れり。（中略）然れども、鏡花が小説の欠点は其結構の奇抜に過くると其人物の稍もすれは不自然ならむとすにあり。」との批判もある。

本作は、鏡花の同時期の作品「夜行巡査」（『文芸倶楽部』明治二十八年四月）とともに島村抱月と坪内逍遙により〈観念小説〉と分類されるようになり、作者のある思想を社会に示す思想的作品としての一面は評価された。しかし〈観念小説〉群は、徐々に〈観念〉を作品に示す程度や方法が大衆の好奇心を駆り立てるための材料に過ぎないと批判されるようになり、「泉鏡花の『海城発電』（八面樓主人『国民之友』明治二十九年一月）などで言われているように「想の為に事を仮設したにすぎない」作品である」とまで評され、対社会的意義を否定されていくようになる。

今日に至るまでの先行研究では主に、鏡花が『太陽』（明治二十八年

五月、岩波書店）に発表した「愛と婚姻」と合わせて、婚姻という社会原理に対する〈純愛〉の挑戦という「愛の主張」（村松定孝「作品解題」『鏡花全集 別巻』昭和五十一年三月）の物語として考察されてきた。純愛の挑戦の矛先を、松村友視の言うような「社会原理」であると読む²⁾か、塚越和夫のいうように、「宗教家」であると読む³⁾のかといった多少の違いはあれども、高峰と貴船夫人が九年前の邂逅を経て同じ日に死ぬという筋から、恋愛至上主義や芸術至上主義といった「鏡花固有のロマン」を見出す読みが主であることに変わりはない。

近年の研究には、本作を鈴木啓子や藤村猛の⁴⁾、本作の主題を社会原理と純愛の対立ではなく高峰と貴船夫人との恋愛における〈相克〉であるとする読みや、〈母〉や〈分身〉をキーワードに、高峰を鏡花自身、貴船夫人を鏡花の母すずの分身であるとし、「自己と母の分身を作品のなかで一纏に葬」ることで自己回復を図った物語であるとする日置俊次の⁶⁾読みなどもある。

本作の考察の観点は様々で枚挙に遑が無い。しかし、それらの殆どが共通して、二人の男女の一瞬の邂逅を描いた〈下〉から九年後の再会の場面である〈上〉までの空白の九年間を、高峰と貴船夫人との相思相愛の恋愛関係すなわち〈純愛〉に焦点を当てて埋めることを目的としているように思える。

しかし、語り手である「予」もまた、〈純愛〉の物語の主役として読まれてきた高峰と同一日に小石川の植物園で貴船夫人の美に心打たれ、九年後にまた高峰と同じ日に外科室で夫人と再会を果たしている人物であることを忘れるべきではない。「予」は、高峰と貴船夫人の死を見届

けそれを物語る語り手として読者の背後に隠れてしまっているように見えるが、「予」には「画師」という職業や高峰と「兄弟もただならざる」仲であることが設定されている。また、その語りは多分に「予」の主観を含むものである。

実は好奇心の故に、然れども予は予が画師たるを利器として、兎も角も口実を設けつゝ、予と兄弟もただならざる医学士高峰を強ひて、某の日東京府下の一病院に於て、渠が刀を下すべき、貴船伯爵夫人の手術をば予をして見せしむることを余儀なくしたり。(傍線引用者、以下同)

冒頭を引用したが、ここからわかるように語りに「予が」や「予は」といった表現が多用される。同時期の「夜行巡査」、「義血侠血」(『読売新聞』明治二十七年十一月)、「琵琶伝」(『国民之友』明治二十九年一月)の語りとはやや異質である。またこれらの作品では語り手の職業や登場人物との関係なども明かされていないため、「外科室」においての語り手の異質さは注目に値する。

「予」を単なる語り手としてではなく、ひとりの登場人物であるとして考察するとき、本作はこれまで読まれてきたような高峰と貴船夫人との相思相愛の物語とは違った一面を表すのではないだろうか。本稿では、語り手である「予」の設定に注目し、「外科室」を読み直すことを目的とする。

一、「予」と高峰

まず、「予」の画師という職業と、高峰の医師という職業の同時代性を探りたい。二人は職業という点で比べてみると〈観察者〉という共通した性質を持っている。

まず、画師という職業について考える。峯村至津子は、本作の初出誌である『文芸倶楽部』について、明治二十八年の発刊以来同年八月の第八編まで第七編を除くすべてに画家が登場する作品が掲載されているという事実を指摘している。⁽⁷⁾このような当時の文壇における画家への関心は、歴史的事項を考えると明治二十一年の東京美術学校の創立とも関係するのではないだろうか。「予」が東京美術学校で美術を学んでいたとここで言いまわすことはできないが、同時代に画家になろうとした者たちがどのように絵を学んだかを考えることは、「画師」たる「予」が持つであろう性質を明らかにすることの一助となるはずである。

東京美術学校は、『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇』⁽⁸⁾によると、明治維新以来のフェノロサ、岡倉天心による大々的な美術振興運動をきっかけとし明治二十年十月四日に文部省直轄として設立された美術学校である。以下にここでの全課程のうち最初の二年間の基礎教育の内容について書かれた文書を引用する。

具象形体を対象とし(自然形体の研究)、花卉より始めて山水、動物、人物の順に写生の練習をする。(中略)フェノロサには生徒がこれを修了したならば美術のあらゆる形式や問題に精通すること

になるだろうという観測があった。

ここでは、専門課程に進む前に修得すべきものとして写生が挙げられている。学生は屋外に写生に赴くこともあったようである。つまり画を描く人（＝画師）の基礎となるのは対象のありのままを観察する客観的描写であったといえる。

次に医師という職業について考える。河内重雄⁽⁹⁾は、当時の医学生が手術室で手術台を取り囲み、外科手術を〈観察〉していたという日常を、長尾折三編『日本外科全書』（大正三年十二月、吐鳳堂書店）から解き明かしている。医学の基礎に、人体を解体して構造を観察記述する解剖学があることも興味深い。

このことは、医科大学で医学を学んだ高峰にも「予」と同じ〈観察者〉という性質を読み取る根拠となり得、また〈上〉の舞台である「外科室」という場所そのものが同時代の現実世界において〈観察〉の場であったことも示すだろう。

作中でも、手術台の貴船夫人を医師や看護師の他に「なにがし公」、「なにがし候」「なにがし伯」といった親族が複数で取り囲んでいる。種田和加子も「高貴な夫人が衆人監視のなかで手術をうける」という状況を「露骨に見世物的である」と表現しているが、作中の手術室はその場の人間全員が貴船夫人の手術を視ることを目的としている〈観察〉の空間なのである。

〈下〉の舞台である「小石川植物園」も、本作の発表当時〈観察〉の場であった。大場秀章⁽¹¹⁾によると小石川植物園の前身は徳川幕府の葉草園

で、かつては幕府直轄のものであったが明治十年の東京大学設立と同時に大学附置の植物園となり、一般へも公開されるようになったのである。一般の観覧客も多かったようだが、本来の目的は研究のために様々な植物を収集、栽培し、〈観察〉する事であった。〈上〉の舞台である外科手術室と同じく、〈下〉の舞台である小石川の植物園も同時代において〈観察〉の場所であったのである。

このような小石川植物園の〈観察〉のイメージは、作中では「商人体の壮者」が貴船夫人や他の女性を観察する〈下〉に現れている。以下に引用する。

「何しろ、三人とも揃ってらあ、どれが桃やら桜やらだ。」／「一人は丸鬚ぢやあないか。」／「何の道はや御相談になるんぢやなし、丸鬚でも、束髪でも、乃至しやくまでも何でも可い。」／「ところでと、あの風ぢやあ、是非、高島田と来る処を、銀杏と出たなあどういふ気だらう。」／「銀杏、合点がいかにぬかい。」／「え、わりい洒落だ。」／「何でも、貴姑方がお忍びで、目立たぬやうにといふ肚だ。ね、それ、真中のに水際が立つてたらう。いま一人が影武者といふのだ。」／「そこでお召し物は何と踏んだ。」／「藤色と踏んだよ。」

小石川植物園で二人の「壮者」は、貴船婦人をはじめとする貴人の一行、特に女性らの髪型や服装などを〈観察〉している。引用部分の後の二人の会話も女性たちの「歩行ぶり」、「お育ち柄」、「着物」や「羽織」、

「蝙蝠傘」を〈観察〉し、あれこれ話し合うものである。そして、高峰と「予」もまた「傍のベンチ」でこの「壯者」二人の会話に耳をそばだてて〈観察〉しており、本作での小石川植物園は〈観察〉の場として機能していると言えよう。

「予」が観察者であることは多くの先学も示しているが、同時代における画師と医師という職業から「予」と高峰について考えると、二人の間に〈観察者〉という共通点を見出すことができる。

前掲の『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇』には、森鷗外が行った「美術解剖学」の講義ノートも収録されており、そこには人間の臓器が模写されている。「予」と高峰が身を置いた美術の世界と解剖学（＝医学）の世界は〈観察〉というイメージで結び付けることができると言え、〈上〉と〈下〉の舞台となった場所の同時代性と合わせて考えると「外科室」の構造は、〈観察者〉である男二人が、同じ日に〈観察〉の場所「小石川の植物園」で一人の女性に出会い、九年後また〈観察〉の場所「外科室」で同じ日に同じ女性に再会する物語であると整理できる。

小説における語り手は、物語世界で起こる出来事やそこに存在する人物を観察し、読者に伝える。本作中でも読者は、「フロックコト着たる紳士」「制服着けたる武官」といった人々の身なり、「なにがし公と、なにがし候と、なにがし伯」などという爵位の細かな違い、手術室にはいつてからの夫人や高峰の服装、顔色、表情などの全てを語り手の詳細な〈観察〉を通して読むことになる。小説を読む時、読者は語り手の視線を通してしか物語世界を見ることが出来ないが、その性質を考えると「予」の画師という設定は、それが持つ〈観察者〉という性質によるも

のであると言え、それが「予」が「画師たる」所以であるとも言えるのではないだろうか。

二、物語る「予」

「外科室」が画師である「予」の語りによって読まされる物語であることを踏まえたうえで、もういちど本作を読み直していきたい。

ここで改めて本作の梗概を簡単に示す。「予」は「東京府下の一病院」に、友人で医師の高峰が執刀する貴船伯爵夫人の手術を「好奇心の故に」見学しに行く。いざ手術が始まろうかと言うときに、貴船夫人は「謔言」を言う恐れがあるという「麻酔剤」は飲みたくない、麻酔なしで開腹してくれと要求しだす。周囲は、思い留まるよう説得するが、夫人の決意は変わらず、執刀医である高峰はついに麻酔なしでの手術を行う。夫人は手術が原因で息絶え、高峰も「同一日」後を追うように死んだ。「予」が後から語るところによると、語られている現在の九年前、医学生であった高峰は「予」と小石川植物園に赴いた際に九年前の貴船夫人に出会い、その美しさに魅かれていたのだという。以上が本作の大まかな筋である。高峰と貴船夫人との一瞬の邂逅からその後二人の再会と死までの九年間の空白をいかに埋めるかが考察の対象になってきた。

其後九年を経て病院の彼のことありしまで、高峰は彼の婦人のことにつきて、予にすら一言をも語らざりしかど、年齢に於ても、地位に於ても、高峰は室あらざるべからざる身なるにも関らず、家を納むる夫人なく、しかも渠は学生たりし時代より品行一層謹厳にて

ありしなり。予は多くを言はざるべし。

〈下〉の末尾で「予」はこのように語ることで高峰と夫人との間の恋愛感情を仄めかし、〈上〉での劇的な二人の男女の死が、情死であったかのように語り、読者に作中の〈上〉〈下〉間の空白を二人の恋愛で埋めるように読ませる。手術台の上の貴船夫人の激しい言動と、九年前の二人の「予」を含めると三人の「たった一瞬の出会いを「予」によって高峰と貴船夫人の〈相思相愛〉の情と因果付けるように読まされてしまったために、読者は本作の急激な展開に困惑するのではないか。私たちは「予」の語りによる仄めかし抜きに〈上〉と〈下〉の間に高峰と夫人の相思相愛の恋愛関係を読むことはできないのである。

先に引用した〈下〉の末尾の「予にすら一言をも語らざりしかど」という注意書きは、「予」と高峰の「兄弟もただならざる」関係と呼応して兄弟同然の「予」にさえ言わずに抱えていた秘密というイメージを強調すると読むこともできるが、単に「予」が高峰の口から直接夫人への想いは聞いていないという事実も示し、高峰と貴船夫人が互いに恋心を抱いていたということは読み取れない。

「でも、貴下は、貴下は、私を知りませぬ！」

言ふ時晩し、高峰が手にせる刀に片手を添へて、乳の下深く掻切りぬ。医学士は真蒼になりて戦きつつ、

「忘れませぬ！」

(中略)

其時の二人が状、恰も二人の身边には、天なく、地なく、社会なく、全く人なきが如くなりし。

ここに引用した〈上〉のクライマックスも同様である。たしかに「外科室」で貴船夫人が高峰に対して放った「貴下は私を知りませぬ！」という言葉は、「貴下」は、「私」を知らないが、「私」は、「貴下」を知っていたということを示し、夫人が高峰に対して何らかの特別な感情持っていたことは言えるだろう。しかしそれが九年前から持ち続けていたものかどうかは定かではない。

夫人が手術日より前に既に入院しており、その時に高峰を見かけていた可能性については河内重雄が指摘している。¹²⁾小石川植物園での行違いでは貴船夫人一行の誰も「予」と高峰の方に意識が向いている様子は無いのである。貴船夫人は病院で初めて高峰を意識し、そこではじめて何らかの感情を抱いたということも考えられなくはない。

手術台での夫人の「忘れませぬ。」という言葉に対する高峰の返答からも、高峰の夫人への恋心は読み取れない。相手が九年前に〈観察〉した佳人でなかったとしても、「肉を殺いで、骨を削る」手術を「麻醉剤」なしで行えと求める患者のことなど忘れるはずがなく、恋愛感情による発言とは決め難いのではないか。

そもそも、「予」が高峰と夫人の恋愛関係を種明かしする〈下〉でも、高峰から貴船夫人に対しての恋愛感情は読み取れないように思える。そればかりか、貴船夫人に対してより心を動かされているのは「予」であるようにも読める。〈下〉で貴船夫人一行が通り過ぎた後、「見たか」と

その美しさについて最初に口を開くのは「予」であり、その問いかけに對して高峰の反応はただ頷くだけである。高峰の「真の美の人を動かすことあの通りさ、君はお手の物だ、勉強し給へ」からは、他人事のようなそっけなさを感じる。そのあとの「予」の「予は画師たるが故に動かされぬ。」という語りも、「予」に与えられた画師という職業の設定が強調されているようであり、逆に高峰は画師ではないが故にさほど心を動かされなかったという事実を逆説的に示してしまう。「真の美」が「動かす」のはあくまで「人」(＝他人)であり、高峰ではない。

「予」の語りを除いた直接話法から読み取るうとした場合、高峰と貴船夫人との出会いとその後の二人の死は、彼らが相思相愛であったがゆえであると特定するのは難しい。会話文も、「予」によって語る・語らないといった編集が加えられているとも言えるが、少なくとも「予」以外の登場人物の言葉であり「予」の主観からある程度の距離を取ることが可能であろう。

二人の恋愛の物語はあくまで「予」の認識したものであり、それが高峰や貴船夫人の認識と共通であるとは言えない。このような「予」の語りから見る高峰と貴船夫人の恋愛関係の有無については、野口哲也が詳述している。¹³⁾「小石川の植物園」と「外科室」での出来事を、恋愛物語として語るのは、他でもない、語り手の「予」である。そうであるなら、高峰の死は貴船夫人に対する恋愛感情によってでは無かったのではないか。

「予」と高峰は、同じ〈観察者〉であると先述したが、同じ場所で同じ時に夫人をみかけた二人の〈観察者〉の生死を分けたものは何であっ

たのだろうか。また、高峰が貴船夫人との恋愛に殉じたというのが「予」の認識に過ぎないとするのであれば、高峰はなぜ夫人と「同一日」に死ななければならなかったのだろうか。

高峰の死については、貴船夫人と「同一日に前後して相逝けり」としか書かれておらずその理由は定かでは無い。従って、患者である貴船夫人が医師である高峰の行う手術中に死んだという単純なプロットから考えて、高峰の内面ではなく、医師という職業のあり方に注目することでこのことについて考えたい。

高峰と貴船夫人の死の原因は、従来読まれてきたような高峰と貴船夫人との〈純愛〉ではなく、彼らの〈職掌〉にあるのではないだろうか。

三、「外科室」の〈職掌〉

鏡花は、明治二十六年に執筆した「他人の妻」(後に「怪語」と改題して発表、『太陽』明治三十年七月)からいわゆる〈観念小説〉に「職分としてみだりに私情を交えることをいさぎよしとしない」人物を登場させている。「外科室」と同時期発表の「夜行巡査」の主人公八田はその代表であろう。

「夜行巡査」の舞台は近代と前近代が対立する明治の世である。そこで主人公八田巡査は、心から憎い宿敵が冬の冷たい濠に誤って落ちる場面に遭遇する。八田巡査は泳ぐことが出来ない。極寒の濠に宿敵を追って飛び込めば、泳げない八田が命を落とすことは明らかである。また、宿敵がこのまま死ねば八田は念願叶ってお香という女性と結婚することが出来る。しかし八田は、「警官として、社会より荷へる負債を消却せ

むがため、あくまでその死せむことを、寧ろ殺さむことを欲しつゝ、「職掌だから」と宿敵を追って濠に飛び込み、命を落とす。

「夜行巡査」は恋人であるお香と結婚したいという私情と、溺れかけている相手が例え憎んでいる者でもそれを助けなければならぬという警官の職務との間で揺れ動く八田巡査の「職務と私情の相克矛盾」の物語であるとする読みが広く共有されているが、ここで八田にとって「警官として」の「職掌」は、「社会」つまりはその雇い主である政府から荷った「負債」であった。そうであるならば、八田巡査が濠に飛び込むのは、人助けの気持ちがお香への思いを上回ったことよってではなく、「社会より荷える負債」である「職掌」から逃れるための自殺であったとも言えるだろう。

「夜行巡査」に対する同時代の評価は、人物や素材の新しさへの評価と結構の不自然への批判のどちらも見受けられ、その斬新さ故か、翻案であろうとも評価されてきた。このような評価は「夜行巡査」の二か月後に同じく『文芸倶楽部』に発表された「外科室」への評価とも共通する部分が多くあるが、同じ「観念小説」の中でも、「外科室」においては職分（＝「職掌」）と私情という観点からの考察はあまりされていないように思われる。

ここで「夜行巡査」についてこれ以上詳しく述べる余裕は無いが、同時期に発表された「夜行巡査」の八田の死に「職掌」の問題が関わると読めるのであれば、語り手である「予」にさえ職業が設定されている「外科室」の考察でも、八田が社会から与えられた職分や役割としての「職務」を言い換えて言うところの「職掌」というテーマについて考え

ることは可能であろう。

高峰と貴船夫人の死の理由を二人の間の「純愛」ではないところ探すために、「外科室」の主な登場人物の職業から、彼らのそれぞれに与えられた「職掌」がどのようなものであったか考察したい。

まず高峰のような医療従事者の「職掌」は患者の病を治し、命を救うことであろう。明治四十年までの教育について書かれている野口義男『明治教育史』（明治四十年十二月、育英社）の第四章第三節には、官立、私立を問わず当時の医学校の歴史がまとめられている。これによると、「醫師之儀」は「人の性命に関係し実に不_レ容易職」であるため、「維新以降我邦に於て攻究せられたる學術」（＝洋学）の中で政府は「特に医学に重きを置」いていたという。医学を学ぶ者に社会が寄せる期待が推し量られよう。また、明治元年より医学の教育制度は漸次整頓されていくのであるが、明治六年に学制に追加された医学校の規定について、

学則の布達文中に「蓋し人の世にある性命より貴きはなし至貴の性命固より鹵莽拙劣の司るべきに非ず云々」の文字あるを以て見れば当局者大に斯道を重じたるを見るに足るへし。

とある。九年前「医科大学に学生なりし」高峰が受けた教育は、「人の性命」は何よりも貴いものであるとの考えを軸にしていたのである。医師とは人の生き死にに関わる仕事であり、まさに「大いなる責任を荷へる身」であった。

「一時後れては、取返しがりません。一体、あなた方は病を軽蔑して居らるゝから埒あかん。感情をとやかくいふのは姑息です。看護婦一寸お押へ申せ。」

いと厳なる命の下に五名の看護婦はバラ／＼と夫人を囲みて、其手と足とを押へむとせり。渠等は服従を以て責任とす。単に、医師の命をだに奉ずれば可し、敢て他の感情を顧みることを要せざるなり。

ここに引用したのは作中の貴船夫人の手術の場面である。高峰以外に手術に立ち会っていた「医博士」や「看護婦」は、麻酔を使わないでほしいという夫人の思いを汲まない。しかし、これは安全に手術を行う為に当然とるであろう行動で、とくに医博士の言葉は命を扱う者が持つ責任感を示しているだろう。

高峰も、「誓ふが如く、深重厳肅なる音調もて」執刀する。高峰の貴船夫人に対する恋心は「予」による認識にすぎないことはここまで見てきたとおりであるから、「夫人、責任を負って手術します。」という言葉の責任は、言葉通り医師として人の命に負うべき責任のことである。一介の外科医ではない、「外科々長」である高峰にはこの麻酔なしの手術にも成功の算段があったのではないか。であるからこそその「責任を負って手術します。」という発言なのではないだろうか。事実、手術は「三秒にして」「佳境に」進むほどで、このまま夫人が「足の指をも動かさ」ずにいられたならば成功していたのかも知れない。しかし、夫人は結果として命を落とすことになる。

同時代の医学校の教育史をみても、作中の手術室の様子を見ても、医

師という職業は他の何よりも貴い人命を扱う職業であり、彼らに社会が与えた役割は「人の性命」を救うことであった。高峰はこの医師としての〈職掌〉を果たせなかったことになる。

次に貴船夫人について考える。貴船夫人は、伯爵の夫と、「七、八歳の娘」を持つ。親族には「なにがし公、なにがし候」と爵位をもつ者たちがおり、お付の侍女もいるような貴人である。

明治初期の日本の女性が「家」に縛られ、良妻賢母であることを社会から求められていたことは周知の事実で、その存在は家の継承と次世代の育成のためであった。貴船夫人にとってもそれは例外では無かったはずだ。まして、爵位を持つ家に嫁いだ夫人にとっては良妻賢母という役割がいわば〈職掌〉であったのではないか。夫人が親族（＝「家」）から求められた母としてあるべき姿は、

侯爵は洪面造りて、／「貴船、こりや何でも姫を連れて来て、見せることぢやの、なんぼでも児の可愛さには我折れよう。」／伯爵は、
領きて、／「これ、綾。」／「は。」と腰元は振り返る。／「何を、
姫を連れて来い。」

と、手術を拒否する夫人を説得するのに子どもが利用されている本文からも読み取れるだろう。母親としての役割が大きいからこそ、夫人はこれを聞いて「堪らず遮」るのである。

貴船夫人は夫や子どもがありながら、外科室の手術台で高峰に「貴下だから」麻酔なしの手術も痛くはないと特別な想いを告白する。このこ

とにより、伯爵家に嫁いだ女性に課される〈職掌〉は果たされなくなる。

夫人の死は、高峰の執刀によるものではない。高峰の腕を以てすれば完遂されていたかもしれない手術であるのに、夫人はそれを望まず、「乳の下深く掻き切り自ら命を絶つ。これは、時代に要請されたあるべき姿でいられたなかった女性の自殺なのである。高峰の死については、野口哲也が、「高峰の自殺は、患者の命を救うという、感情とは別に存在する職分を果たせなかった外科医としての責任を取ったものと見ること十分可能」であると指摘している。¹⁷⁾ 高峰の死が「自殺」であったかどうかは本文に書かれておらず、そう決めてかかるのは「予」の語りに寄せられている気も些かするが、夫人の死の強烈なインパクトの後であることを考えると、敢えて病死や事故死を疑うより自殺であるとするのが自然であろう。「外科室」の物語のなかで死んでいった二人には果たせなかった〈職掌〉という問題が共通してあるのである。

では画師である「予」の〈職掌〉とはなにか。作中には「予」が絵を描く場面は描かれない。絵について「予」が語る場面もない。そこで、鏡花本人の芸術観から作中の画師に想定されている〈職掌〉について考えてみたい。

本作発表から少し時代は下るが、明治四十二年に鏡花が絵画を例にあげ「芸術作品」について語った談話¹⁸⁾がある。少々長くなるが一節を引用する。

假ひ事実を書くとしても、厳密の意味から云つて、必ず作家の想像が加はるものと思ふ。(中略) 事実ばかりでは作品は書けない。事

実と想像をうまく混ぜ合はして、それを傑れたアートの依つて書き表はしたのが作品である。(中略) 同じ自然を見ても、その目に映る自然以外に作者の想像が働いてその自然が非常に美しく見えることがある。之は即ち想像力で、私は、芸術作品には、何うしても此の想像力と云ふものを排斥することの出来ぬのは云ふまでもなく、単に事実ありのまゝを書くのみでは作品とすることが出来ないと思ふ。

作家がその目で見たものを自分なりに解釈し想像と織り交せて表現したものを芸術であり、芸術家や小説家には「想像力」が不可欠であると鏡花は言う。このような作家自身の芸術観を下敷きにして語り手は画師であると設定されているのではないか。〈観察〉した「事実」を主観的に解釈し、〈想像〉を加えて表現することが画師である「予」の〈職掌〉なのである。

「予」は物語の中で絵を描くことはしなかったが、読者が読まされた高峰と夫人との恋愛物語こそが、「予」が「事実と想像をうまく混ぜ合はして、それを傑れたアートの依つて書き表はした」「芸術作品」であったと言えるのではないだろうか。

高峰と貴船婦人の死を〈観察〉した「予」は二人が九年前から相思相愛であったに違いないと〈想像〉を加えて〈解釈〉し物語る。貴船夫人の高峰への並外れた執心を目撃した「予」は、高峰の秘めた恋心というものを想像で補うことで一種の作品を創り上げたのである。高峰や貴船夫人とは異なり、「予」はこのことで画師としての〈職掌〉を果たして

いる。同じ〈観察者〉でありながら、医師としての〈職掌〉を果たせなかった高峰は命を落とすことになったが、画師としての〈職掌〉を果たした「予」は高峰と貴船夫人の死を語る存在として生きている。二人の〈観察者〉の生死は、貴船夫人との関係ではなく〈職掌〉が分けたと言つてよいだろう。

四、「予」と貴船夫人

「予」の語ることが「予」の認識に過ぎないことを念頭に置き、直接話法に注目すると、高峰の死は夫人への恋愛感情と関係がない可能性が高いということは再三述べてきた。重要なのはそれぞれの登場人物が社会から与えられた役割であり、彼らの死にはそれが関係しているというのが本稿の主張である。

次に考えるべきは〈職掌〉にまつわる高峰と貴船夫人の死を語り手である「予」はなぜ二人の恋愛の成就という物語として〈解釈〉し、読者にそのようであるかのように読ませなければならなかったのかという問題である。

そもそも、九年前の一瞬の行き違いの時から既に貴船夫人への関心は高峰より「予」のほうが高かったように思われる。「予」は「思わず後ろを見返」るほど貴船夫人の「真の美」に心を動かされ思わず「見たか。」とその感動を高峰と共有しようとする。夫人らとすれ違ってしばらくした後、遠くに「ちらと」みえた「藤色の衣の端」が目に入ってしまう様子はいかに夫人の姿に心惹かれたのかを示す。

また、高峰が「病院の彼のことありしまで」、「彼の婦人のことにつき

て、予にすら一言をも語ら」なかったとすれば、「予」が貴船夫人の手術に「好奇心」を抱いたのは高峰から話を聞いたからではないはずで、手術を受ける夫人の存在を「予」自身が九年間覚えていたからと言ふことになる。

病院についた際、「予」は周りの様子を詳細に観察し読者に語り始める。その中に「予は今門前に於て見たる数台の馬車に思ひ合はせて、密かに心に領けり。」とあるが、「予」は馬車を見て何を「思ひ合は」せ、何を「心に領」いたのだろうか。〈下〉の末尾を見ると、小石川植物園を出て「園を出づれば丈高く肥えたる馬二頭立ちて、磨硝子入りたる馬車に、三個の馬丁休らひたりき。」と馬車についての記述がある。ここで〈上〉の冒頭で「予」が見る「数台の馬車」に敷かれた伏線は回収される。「予」は病院で見かけた馬車を九年前に見かけた馬車と「思い合はせ」、この場に小石川植物園で見かけ、その美しさに心を奪われた夫人がいることを確信し「心に領い」たのではないか。〈上〉〈下〉の馬車についての〈観察〉は、高峰ではなく「予」の心にこそ、夫人の姿が焼き付いていたことを示すものである。そうであったからこそ「予」は「高峰を強ひて」夫人の手術を「予をして見せしむることを余儀なくした」のだろう。

手術室に入った後も、「予」は「かよわげ」で「気高く、清く、貴く、美はし」い夫人が「死骸の如く横」たわっているのを見て「慄然として寒さを感じ」、逆に「太く落着」いている高峰に対して、その様子を「予」は「心憎」いとすら感じている。

「予」は、異様なまでに関心を抱きそれをおそらく九年間保持してい

た夫人とようやく再会を果たす。そのいわば思い人は、既婚で子どもある身でいながらどうやら高峰にただならぬ感情を抱いているようである。そしてその思いを高峰に告げて夫人が息を引き取るのを彼は〈観察〉した。一部始終を見届けた「予」は、長年忘れられずやっと再会できた夫人のそのような様子を不憫に思ったのでは無いだろうか。

社会に与えられた妻や母という役割を拒絶し、自らの命を絶つてまで高峰に思いを伝えたことに感じ入り、高峰の死を夫人への恋愛感情と因果付けることで、自分の「芸術作品」のなかで夫人の思いを成就させてやりたかったのではないだろうか。「予」が語り手であることと、画師であることの特権を以て語った物語は、貴船夫人のために削り上げた物語だったのである。

「予」は最後に二人が死ぬ結末を知っている状態で読者に向けて語り始める。夫人のために〈下〉での出会いから〈上〉までを語り直すとき、「予」は高峰のその時々を態度を都合のいいように語ることもできるのだ。すべてが終わった時点から「予」が高峰や貴船夫人らの物語を語り直す構造は、のちの「高野聖」『新小説』明治三十三年二月）などに言われるような入れ子型構造¹⁹⁾に通じるものもあるのではないか。

〈上〉において「外科室」で「予と相目し」た高峰は「唇辺に微笑」を浮かべており「平然として冷か」であった。死骸のような夫人の様子を見ても「太く落着」いている。「予」が夫人に対して高峰の心が動いた様子を感じられず「心憎」く思うのは、高峰と夫人が相思相愛であったと思いたいと言う願望ゆえの感情である。いざ、看護婦に手術の開始を促された時、「予」には高峰の声が震えを帯びて聞こえたという。し

かしこれはあくまでも「予が耳には達した」に過ぎず、事実、その後の高峰は「看護婦、刀を。」と執刀するまで、病室内で唯一の「顔の色動かさるもの」として「自若たる」態度を貫く。

〈下〉の小石川植物園での「真の美の人を動かすことあの通りさ、君はお手の物だ、勉強し給へ。」と言う言葉への「さも感じたる面色」にてという注意書きも「予」の主観に過ぎない。

日常生活でも、ある物事の結末を知ってからその過程を振り返ると、そういうえばあの時のあれはこういうことであった、などと合点がいくことはままある。貴船夫人のために、高峰の冷静な態度に少しでも揺らぎを感じ取りたい「予」の導きによって私たちは高峰の恋心を想像させられてしまう。それがあまりにも微かなために、終わりまで読み終わった後突飛な印象を受けるのである。

もう一点、「外科室」を読むに当たってやはり「愛と婚姻」を無視することはできない。

人の未だ結婚せざるや、愛は自由なり。諺に曰く「恋に上下の隔なし」と。然り、何人が何人を恋するも、誰かこれを非なりとせむ。

一旦結婚したる婦人はこれ婦人といふものにあらずして、寧ろ妻といへる一種女性の人間なり。吾人は渠を愛すること能はず、否愛すること能はざるにあらず、社会がこれを許さざるなり。愛することを得ざらしむるなり。要するに社会の婚姻は、愛を束縛して、压制して、自由を剥奪せむがために造られたる、残絶、酷絶の刑法なりとす。

これは、「外科室」発表と同時期に「愛」が社会制度としての結婚の中では成り立たないことを鏡花が主張したものであるが、家庭と高峰との間で煩悶し死んでいった貴船夫人に同情を寄せ、せめて自分の語る物語の中では自由な恋愛を成就させてやろうという「予」の姿勢は、やはりこの「愛と婚姻」を書いた鏡花のそれと重なる。

古来いふ佳人は薄命なり、と、蓋し社会が渠をして薄命ならしむるのみ。婚姻てふものだになかりせば、何人の佳人か薄命なるべき。愛に於ける一切の、葛藤、紛紜、失望、自殺、疾病等あらゆる恐るべき熟字は皆婚姻のあるに因りて生ずる所の結果ならずや。

これも「愛と婚姻」の一節である。この薄命の「佳人」は、「外科室」においては言うまでも無く美しく気高い貴船夫人である。結婚さえしていなければ高峰への気持ちはなんの罪にもならないものを、貴船伯爵との結婚で「妻」と言う人種に「束縛され」てしまったことにより、夫人の思いは行き先をなくしてしまう。思い返せば、「貴船伯爵夫人」のフーストネームは示されていない。

また鏡花は「愛と婚姻」で、「情死、駈落、勘当等、これ皆愛の分弁たり。」とも書いている。「予」は、社会から担った負債（＝「婚姻」）による貴船夫人の自殺を高峰との「情死」であったと〈解釈〉すること、貴船夫人の恋を「愛」に昇華させようと試みたのではないだろうか。

其時の二人が状、恰も二人の身边には、天なく、地なく、社会な

く、全く人なきが如くなりし。

渠ら二人は罪悪ありて、天に行くことを得ざるべきか。

〈上〉〈下〉それぞれの末尾を引用した。

〈上〉の結びの「あたかも」は、まるでないようであったが、実際には夫人の周りに「社会」はたしかにあったことを示してしまう「予」の悲痛な言葉である。「予」は、九年前に夫人を見かけたとき高峰も一緒にいたことを説明することで、二人の「情死」の物語を削り上げる。

「情死」であるから貴船夫人の思いは「愛」である。だから結びに反語表現で「二人には」、延いては貴船夫人には、「罪悪」などないのだと主張する。末尾の言葉は貴船夫人に贈る言葉であるとも読める。

「予」による物語りは画師としての〈職業〉でもあり、同時に「予」の貴船夫人へのある種の〈純愛〉の形でもあったのである。

おわりに

「外科室」は「予」の語りによって物語が進行した。「予」は、単なる語り手ではなく、一登場人物として九年前に小石川植物園で高峰と共に貴船伯爵夫人を見かけ、外科室で高峰と共に夫人と再会している。「予」には画師という職業が設定されており、それは〈観察〉を基本としそこに解釈を加えて芸術作品を創り上げるものであった。

そのような画師という職業を設定された「予」は、高峰と貴船夫人という二人の人物の死を語る時、二人の間にあたかも相思相愛の〈純愛〉

があったかのように読ませる。しかし、語り手である「予」のバイアスを極力取り除いて本作を読む事を試みると、高峰と夫人の死は社会から与えられた〈職掌〉にまつわる自殺であると読むことができ、さらに従来〈純愛〉というキーワードを通して読まれてきた本作にも同時期の鏡花作品において無視することのできない〈職掌〉というテーマを読むことができた。

これまで読まれてきた高峰と貴船夫人との間の恋愛の物語は、「画師」の〈職掌〉に留意すれば、語り手が「画師たる」がゆえの〈想像〉の産物にすぎない。同時代評から再三指摘されるように、二人の恋愛に不自然さを感じるのは、そもそも高峰が貴船夫人に対する恋愛感情など持っていなかったからであろう。

とは言え、本稿は「外科室」の〈純愛〉というテーマを否定するものではない。貴船夫人には母として妻として、婚姻制度と高峰への恋との間で懊悩する物語があり、高峰には医師の自分をめぐる物語がある。「予」にも、貴船夫人を九年間忘れずにいたという物語がある。そのような「予」が二人の死を素材として、結婚制度に飲み込まれた一人の女性の恋を「愛」の物語に昇華させてやろうとする。このような「予」の〈解釈〉と語り直しにこそ貴船夫人への愛情は存在するのではないだろうか。「外科室」は間違いなく〈純愛〉の物語である。しかしここでの〈純愛〉とは、高峰と貴船夫人との間にあるものというよりむしろ、「予」から貴船夫人に向けられているものなのである。

同じ〈観察者〉でありながら、医師としての〈職掌〉を果たせなかつた高峰は結果として命を落とすことになった。一方「予」は高峰と貴船

夫人の死を語る存在として生きている。

画師も医師もスタートは客観描写であり、どちらも〈観察者〉としての一面があることは先述したが、両者の間には〈解釈〉を挟むか否かという点に違いがある。医学のような実学の世界では客観的に〈観察〉したことが事実で、画師が〈観察〉した事実をより美しく表現しようとするような〈解釈〉が挟まれる余地はない。

同じ〈観察者〉であるにもかかわらず、医師である高峰が〈職掌〉を果たせず死に、画師である「予」が生きていることを考えると、〈解釈〉つまり、芸術家の持つ「想像力」こそが「予が画師たる」「利器」であったと言えるのかもしれない。

注

- (1) 島村抱月「小説を読む眼」(『読売新聞』明治二十八年八月二十六日)では、同時期に流行した社会への批判を多分に含む深刻な作品群に対し「觀念まづ作者の胸中に成りて、さてのち巧みに之れに肉を附し皮を附し、一部の小説に仕上ぐるは、此の頃の新流行にて、げに之れまでの小説界の本調子なりしに比ぶれば、一段の進歩なるに相違なし」と記している。これを坪内逍遙が「Y. T」との署名で『早稲田文学』九十六号(明治二十八年九月二十五日)で「觀念派小説」と呼んだ。
- (2) 松村友視「明治二十年代末の鏡花文学―作家主体確立をめぐる素描―」(『国語と国文学』平成二年十月)
- (3) 塚越和夫「外科室」(『国文学 解釈と鑑賞』昭和四十八年六月)
- (4) 鈴木啓子「溢れでる身体、そして言葉―泉鏡花『外科室』試論―」(『日本近代文学』平成十年五月)
- (5) 藤村猛「相克する恋愛―泉鏡花『外科室』論―」(『国語国文論集』平成十一年一月)
- (6) 日置俊次「泉鏡花『外科室』考―分身という方法―」(青山学院大学文

学部『紀要』平成二十九年)

- (7) 峯村至津子「泉鏡花『外科室』の語り手―天なく、地なく、社会なく―」(『女子大國文』平成二十四年一月)
- (8) 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇』(東京芸術大学百年史刊行委員会、昭和六十二年十月)
- (9) 河内重雄「泉鏡花『外科室』の一面―医学小説としてのリアリティーについて」(『語文研究』平成二十二年六月)
- (10) 種田和加子「偶像の逆襲―泉鏡花『外科室』の問題性―」(『国文学雑誌』平成十二年七月)
- (11) 大場秀章編『日本植物研究の歴史 小石川植物園三百年の歩み』(東京大学出版会、平成八年十一月)
- (12) 河内重雄は注9の論文で、外科手術について「手術するには執刀医による診察や様々な検査が不可欠であり、最低でも数日間入院することになる」から高峰と貴船夫人が「外科室」で九年ぶりに再会したとは考えられない。事実、外科室内で九年ぶりに再会したなどは、本文のどこにも書かれていない。」と指摘している。
- (13) 野口哲也「『観念小説』の時代の泉鏡花―『外科室』の位相―」(『文芸研究』平成十四年三月)では、貴船夫人と高峰の会話がコミュニケーションをなしておらず、特に手術中の「夫人の言葉は自足的なものであり、端的に心中や情死と言った、他界や相互性を前提としたものとは異なる」としており、本稿は野口論文に多くの示唆を受けている。
- (14) 手塚昌行「泉鏡花と森田思軒」(『国文学研究』第二十八号、昭和三十八年九月)
- (15) 村松定孝「作品解題」(前掲)には「主人公八田の行動の悲劇が職務と私情の相克矛盾から生ずるもの」とある。またそうした「発想の意図は、既に明治二十六年に執筆した「他人の妻」や「義血侠血」にも共通しており、翌年発表の「海城発電」も同系統の作品といえ」としており、同時期の鏡花作品で「職掌」の問題は重要なキーワードであるといえよう。
- (16) 「夜行巡査」については、魯庵生「小説界の新潮流(殊に泉鏡花を評す)」(『国民之友』明治二十八年九月十三日)に「『哀史』のジャーベルは實に『夜行巡査』を作為せし鏡花子が粉本なり」とあり、「外科室」については

八面楼「泉鏡花作『外科室』」(『国民之友』明治二十八年七月二十三日)には、「是の如き深刻なる恋愛は泰西的にして東洋的にあらず。恐らくは翻案乎。」とある。「外科室」については、三田英彬「泉鏡花の文学」(桜楓社 昭和五十一年九月)に「森田思軒の翻訳したピクトル・ユーゴー作「クラウド」(明23)の中に、「クラウドは其妻の刺刀を取出して己の胸に刺したるが、刃は短く胸は深ければ死するまでに傷つくる能はず、遂に血に塗れたるまま看守の屍の上に累り伏せり」という部分があり、影響的触発を受けたと推測される。」との解説がある。

(17) 注13に同じ。但し野口は高峰の死を「自殺」と断定している。

(18) 泉鏡花「事実の根底、想像の潤色―「事実と想像」(『新潮』明治四十二年七月)

(19) 笠原伸夫「『高野聖』の神話的構想力」(『文学』昭和六十二年三月)では「高野聖」の「語りのなかに別の語り」が嵌め込まれ、その別の語りの中にさらに別の語りが見られるという語り方法は鏡花の後の幻想的な小説に「外科室」では、貴船夫人や高峰が語ることはないが、ある人物が複数の物語を語り直して聞かせるという語り方法は鏡花の後の幻想的な小説にしばしば見られ、語り手のバイアスも指摘されるところである。初期の作品からその片鱗が見えていたのではないだろうか。詳述する余裕はないためここで指摘するにとどめ、今後の課題にしておきたい。

※本文他、鏡花作品の引用はすべて岩波書店版『鏡花全集』(昭和四十八年一月〜昭和五十一年三月、全二十九巻)による。ルビは省略し漢字は新字体に改めた。